

慶應義塾大学教職課程センター 公開研究会

「地域とのつながりで拓かれる学び」

2009年11月7日(土) 14:00~17:15

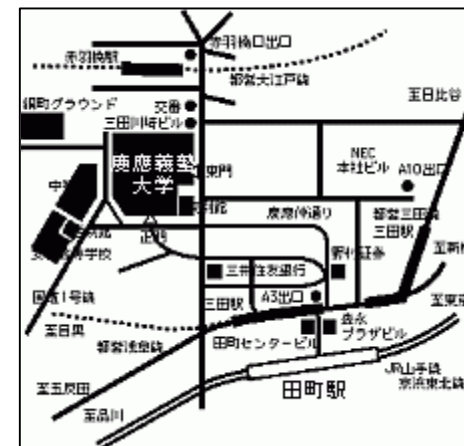
慶應義塾大学三田第1校舎 3階 132番教室

講師：谷保裕子氏 (福井県公立小学校教員、日本生活教育連盟会員)

司会：藤本和久 (教職課程センター)

すべての学校階梯の学習指導要領が10年ぶりに改訂され出そろいました。いまや、教科書作成・検定作業や移行措置のまっただなかです。この10年間、現場の教師たちは、総合学習という新たな学習領域にむきあい、丁寧に実践を重ねてきました。最初は、戸惑いや反対の声もあったこれらの学習領域も、いまやすっかり定着し、学校における授業研究の最重要課題として、また、子どもの姿をリアルにみとることができる学習としてかなりの充実を見せてきています。にもかかわらず、今期の学習指導要領改訂では、総合学習の配当時間はかなり縮減されることになっています。そして、まるで失われた10年であったかのような語られた方を耳にすることがありますが、果たして本当にそうなのでしょうか？

谷保さんは、このカリキュラムの激動の時代にあって、地域とのかかわりの中で、その課題を「そこに生きる1人の大人」として自覚し、子どもたちがどのようにそこから学びを創り、そしてつないでいくのかにこだわって実践を積み重ねてこられました。地域といえば、いつも学校がそこから何かを一方向的に学び取る「果実」のような描かれ方をすることが多いのですが、谷保さんたちの創る総合学習における地域の位置はひと味違います。今を生きる彼女と子どもたちと地域の大人たちが、誰かが誰かに一方的に学ぶのではなく、それぞれ主体性をもって、ともに問題解決に取り組み、学びあい、新たな知見や新たな手法を生み出している現場でもあるのです。新学習指導要領では、学力低下論のあおりをうけて、中央集権的な知と徳の管理が意図されていますが、だれもが、学べば学ぶほど足もとの地域から遊離していく現象が加速してしまうことになりかねません。ここで、改めて、学校の学びと地域との関係を積極的にとらえなおしておくための大きなヒントを得たいと思います。(参考文献：中野光・行田稔彦・田村真広編著『あっ！こんな教育もあるんだ』新評論)



参加自由・無料

問い合わせ先：慶應義塾大学教職課程センター 03-5427-1618 HP: <http://www.ttc.keio.ac.jp>

*学内工事につきご迷惑をおかけします。